

「落語と私」 その拾六

三代目 橘ノ百圓

今月号は先月号に続き、落語の主題「博打」の噺を紹介します。

ウツと言いましても、病院の注射では無いですヨ。業界の中で、賽子賭博の経験の在る方はいらっしゃいますか!? 皆さんは、麻雀世代ですよネ。只、古典と称する噺は、先ず賽子ですネ。賽子一ツが「チョボイチ」二ツが「丁半」三ツが「狐」「チンチロリン」。この賽子は、お釈迦様が布教の為の人集めに考え出されたとの説も在りますが、やはり犀の骨(角)で造ったと言われております。犀骨が変じてサイコロに成ったそうで…。六面体の裏表を足すと必ず七に成る様に出来てます。「一天地六、南三北四、東五西二」これは、大宇宙を表わすんだそうです。噺もそれぞれを扱ってまして、“チョボイチ”は「看板のピン」狐は「今戸の狐」が代表作です。噺に多く出て来るのは、皆さんが一番ご存知の、丁半博奕です。二ツの賽子を壺皿に入れて、表の数を足した偶数が“丁”奇数が“半”実にサッパリとした形の良い遊びです(断っておきますが、私は遣ってませんヨ)今回は、この丁半博奕の出て来る噺を取り上げる事にします。「へっつい(竈)幽霊」と「らくだ」、共に博奕好きの者が登場しますが「へっつい幽霊」には、“向う傷の熊”と言う渡世人が主役で活躍しますが、決して英雄として扱っていません。何か楽をして金が儲からないかな、テな事ばかり考えて生きている遊び人です。只、この熊さんは、度胸は良いですが、他人に暴力を振るう事はないので憎めません。古道具屋から訳ありのへっついを三両付けて貰って来た熊さんが、助力として頼んだのが、今、勘当中の大家の若旦那、道具屋からそのへっついを二人の住む長屋へ差し担いで運ぶ途中、掛けていた縄が軟だった為、プツと切れると、へっついがその場へドスン、と、角が欠けて白い固りが若旦那の足元へコロコロコロ「熊さん幽霊の卵」中を調べると、何と、小判で三百両!熊さんが「俺もこのへっついから幽霊が出るとの噂は、こんなこっちゃ無エかと思っていたんだ」と、若旦那と二人で、百五十一両と二分の山分け、熊さんは、その金を持って博奕場へ。若旦那は吉原へ、二人共一晚のうちに百五十一両二分を使い果して長屋へ戻って来るが、若旦那は、昨日の甘美な夜を思い出してなかなか寝付けないうと、若旦那の所に置いといたへっついから、青白い炎が出たかと思うと、それにさして瘡っこけた男が若旦那の枕元で「金返せエ」「ギャー」テンで若旦那は目を回してしまう。この声に熊さんが駆け付けて訳を訊くと、幽霊の借金取り、熊さんは直ぐに若旦那の実家に行き「やっぱり勘当したとは言え、子供は可愛いんだネ。お母さんが三百両出してくれたヨ、この金、幽霊に叩き返して遣れ」若旦那が嫌がるので熊さんが明るい内から、へっついの側で待っていると、定時の丑三ツ時に幽霊が「お待せしました」と問拔けな顔で現れるが、幽霊の話を知ると、この男は子供の頃からの博奕好きの腕の良い左官の職人。「親が死んだのを幸に、毎日の様に鉄火場通い、案の定借金の山、と、ある日、ツキについてアツと言う間に、三百五、六十両の儲け、家に帰って考えた末に、商売物のへっついの角へ三百両塗り込んで残りの金で遊んでいると、ヒョンな事で死にしまったんです。デッこの金を出して貰うと化けて出るんですが、親方は、良い度胸してますヨ、どうかその三百両私ッしに返してくださいませんか」話しを聞いた熊さんが「俺だって、この金拵えるのに苦労したんだ」と中端幽霊を脅かす様に、

百五十両ずつの山分けにするが、幽霊が「こんな半端はんぱに成ったんじゃ閻魔だって悦びやしねエや、どうです親方、この百五十両と、そっちの百五十両、オッ付けっこしませんか!？」と話しが決まり、熊さんの持っている賽子で百五十両一辺に賭けての丁半博奕、三度ほど賽子を試した熊さんが「勝負に成るヨ、サアどっちだ!？」「私あッしは、左官の長兵衛と言いまして、丁より外、張った事ねア無エんで」「じゃあ勝負だ!悪わりィな四、三シの半だ」「親方サ濟いません、もう一番、お願いします。」「オウ口張くちばりは止よそうじゃねエか、お前まえには付ける元が無エじゃねエか」「親方心配要りません、私あッしも幽霊だ、決あッして足は出しません」地口落です。これは、大阪根多で他の落おげも在りますが、余り東京では聴あきません。むかし家今松師が、時々この大阪の落おげで演ある事が在ります。三代目の桂三木助師が得意で良く高座に懸けて居ましたが、三木助師は、一時“隼いつとき はやぶさの七しち”と名乗る本物の博奕打ちだった事も在り、凄味の在る高座だったのを覚えています。次に紹介する噺は、皆さんご存知の「らくだ」ですが、これも大阪根多で、噺の中に出てくる“カンカンノウ”の唄も踊りも東京では余り馴染あじが在りません。落おげの「ヒヤでも良いから、もう一杯」も、東京の焼場の事を大阪では、火屋ひやと言いますので、この落おげも今一ツピンと来ません。只、この噺は各処に山が在り、普段は大人しい屑屋くせの久きさんが、無理に酒を飲あまされて、徐々に大虎おおとらに変わって行く処など、楽しく聴あける噺です。「オウ、らくだ、居いるけエ」と“らくだの馬”と呼ばれている乱暴者で、この長屋の嫌われ者の所へ、兄貴分の“丁の目の半次”と言う遊び人が訪ねて来るのが幕開きと成ります。「へっつい幽霊」とは違い、噺の中に博奕を打つ場面は在りませんが“丁の目の半次”テエ名前からして、この兄貴分は、丁半博奕が好きなのだと、察あしが付あきます。らくだの葬式を出して遣ると、通りかかった屑屋を呼びつけ「この家うちの物、何なんでも良いから高く買え」と、らくだの死んだ事を告げ、屑屋の商売道具てっぽうざるの鉄砲てっぽう筈はずと秤はかりを取り上げて、長屋の香典集めと、大家おおやの所へ行って「良い酒を三升と、煮染にめを辛目に煮て持って来い、もし大家が断あったら、らくだの死骸しがいのやり場に困あっておりますので、死人にカンカンノウを踊あらせてご覧らんにいますから」屑屋の話はなしを聞いた大家が怒あって断あると、らくだの死骸しがいを屑屋くせに背負せおせて、大家の所へ乗り込み、屑屋にカンカンノウを唄うたわせ、らくだを踊あらせて、酒と煮染にめをせしめて、屑屋の体を浄あめるとの理由で無理に飲あまされた屑屋が、段々と酔あって来て形勢逆転!大虎に豹変、ここから落おげまでは、屑屋が兄貴分として、半次を顎あごで使う場面が続つく訳です。この様に落語の世界観は、八や九く三ざ者を英雄視する訳でも無く、一庶民の嫌われ者として笑い飛ばす処が、マア現実的じやうじきですネ。“買う”は次号と成ります。お楽しみに。



賽子と壺皿

出典：<https://search.yahoo.co.jp/image/search>